

Title	「炎黄子孫」と「中華民族」：近代中国における国民統合をめぐる二つの言説
Sub Title	The Chinese nation and "the descendants of Yandi and Huangdi": two discourses on the national integration in modern China
Author	楊, 志強(Yang, Zhiqiang)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.64 (2007.) ,p.121- 137
JaLC DOI	
Abstract	Along with the rising of the "education on patriotism" in 1992, the term and theory of "the descendants of Yandi 炎帝 and Huangdi 黄帝" was reiterated as an important discourse. The root of this term can be traced back to the Chinese nationalism movement at the beginning of the 20th century, but with the enthusiasm on "Yandi and Huangdi", in recent years, it also induced there evaluation of "Chiyou 蚩尤" in the history as counter part of "Yandi and Huangdi ", and exploded dissident and opposition among experts of sociology from "Miaozu 苗族", a minor ethnic group in southern China. Focusing on the study and research by above sociologists and anthropologists of "Miao" society, the whole process of the upsurge of "Chiyou" in the "Miao" society after 1995 is comprehensively reviewed and analyzed in this thesis. And two parts are introduced as cores of this process, namely the building up of "Chiyou" as the common ancestor of "Miao" society, and the efforts to redress and restore the status of "Chiyou" in history as ancestor of the " ChineseNation". Through reviewing the above phenomena, this thesis introduces the historical background and connotation of the two methodologies represented by the two discourses of "the Chinese nation" and "the descendants of Yandi and Huangdi", and makes an initial analysis on their contradictions.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000064-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「炎黄子孫」と「中華民族」

—近代中国における国民統合をめぐる二つの言説—

“The Chinese Nation” and “the Descendants of Yandi and Huangdi”

—Two Discourses on the National Integration in Modern China—

楊 志 強*

Zhiqiang Yang

Along with the rising of the “education on patriotism” in 1992, the term and theory of “the descendants of Yandi 炎帝 and Huangdi 黄帝” was reiterated as an important discourse. The root of this term can be traced back to the Chinese nationalism movement at the beginning of the 20th century, but with the enthusiasm on “Yandi and Huangdi” in recent years, it also induced the re-evaluation of “Chiyou 蚩尤” in the history as counterpart of “Yandi and Huangdi”, and exploded dissident and opposition among experts of sociology from “Miaozu 苗族”, a minor ethnic group in southern China.

Focusing on the study and research by above sociologists and anthropologists of “Miao” society, the whole process of the upsurge of “Chiyou” in the “Miao” society after 1995 is comprehensively reviewed and analyzed in this thesis. And two parts are introduced as cores of this process, namely the building up of “Chiyou” as the common ancestor of “Miao” society, and the efforts to redress and restore the status of “Chiyou” in history as ancestor of the “Chinese Nation”.

Through reviewing the above phenomena, this thesis introduces the historical background and connotation of the two methodologies represented by the two discourses of “the Chinese nation” and “the descendants of Yandi and Huangdi”, and makes an initial analysis on their contradictions.

はじめに

- 1, テレビドラマ『炎黄二帝』と『釜山大結盟』を巡る騒動
- 2, 「炎黄ブーム」と「蚩尤ブーム」との軋轢
- 3, 「炎黄子孫」と「中華民族」の言説
- 4, テレビドラマ『涿鹿大戦』の流産と「南長城点火」

おわりに

* 貴州大学人文学院教授・日本学術振興会外国人特別研究員・東京大学客員研究員

はじめに

1992年、中国において「愛国主義教育キャンペーン」が始まり、中国ナショナリズムが高揚する中で、「炎黄子孫」の言説が提起され、しかも愛国主義思想を発揚する重要な内容の一つになった。「炎黄子孫」とは、中国古代の伝説上の帝王である黄帝と炎帝を共に漢民族の始祖とし、自らはその子孫であるとする言説であり、20世紀初頭の漢民族による「排満興漢」のスローガンを掲げた民族主義運動に起源が求められるが、この言説が1990年代に再度浮上してきたのである。しかし、「炎黄子孫」という表現や世界の華僑・華人社会に広がってきた「炎黄ブーム」に対して、中国国内の少数民族社会から不満や反発の声が起こってきた。本論は主に90年代以降に中国で多数を占める漢族社会に起こった「炎黄ブーム」と、これに対して少数民族であるミャオ族社会に起こった「蚩尤ブーム」の双方の言説を跡付けながら、清朝末期から中華民国期にかけて形成された「炎黄子孫」と「中華民族」という二つの概念に象徴される、近代中国における国民統合をめぐる二つの言説について整理と分析を試みる。なお、蚩尤とは、黄帝が打ち破ったとされる伝説の王で、漢族に対抗する非漢族の首領とされ、時には古代文献の「三苗」と同一視されてミャオ族の始祖に祀り上げられるに至ったのである。

1. テレビドラマ『炎黄二帝』と『釜山大結盟』を巡る騒動

1997年2月7日、春節(旧正月)の時期に、北京のテレビ局の中央電視台第一チャンネルで中国の五千年前の伝説時代を舞台に、漢民族の始祖とされる炎帝と黄帝の物語を描く14回連続のテレビドラマ『炎黄二帝』の放映が始まった。このドラマでは漢民族の始祖を代表する炎帝と黄帝を仁愛と正義に満ち、人類に文明の幸福を創り与えた人物として描いているのに対し、対立関係にある蚩尤を愚昧、凶暴、残虐な、人類に災難を与える悪魔のように描き、ついには彼の妻子までがみな彼に背いて炎黄の陣営に投じてしまう。

このドラマは中国共産党の河南省委員会宣伝部と河南省廣播電視庁組織が制作した重点番組であったが、放映されると、中国文聯(中国文学芸術家聯合会)が発行する新聞『文芸報』は、2月20日付けの第三面で、全紙面を使って宣伝記事を掲載した。その中で國務院廣播電視部部長・孫家正、雑誌『求是』の副編集長・荀春米、中国社会科学院研究員・童道明らが評論を寄せ、ドラマに対し非常に肯定的で高い評価を下した¹⁾。しかし、このドラマの放映途中で、ドラマの中の悪役で、ミャオ族の始祖と見なされた蚩尤の描写に問題があるとミャオ族社会から反発の声が上がった。ミャオ族が最も多く居住する貴州省では、ミャオ族出身の知識人を中心として1989年に結成された「貴州省苗学研究会」(以下「貴州苗学会」と略称)に所属する人たちが、上述のテレビドラマの蚩尤に対する歪曲化した描写に対して、さまざまな場で彼らの不満と抗議の声を表明することになった。

当時貴州苗学会秘書長を務めていた楊培徳(2007年現在同学会の常務副会長)の回想によれば、彼はこの番組を見ると、すぐに省の文聯や民族学院などに所属するミャオ族の同胞に電話をかけ、互いに連絡を取り合って貴州苗学会の会議を招集し、対策を検討した²⁾。その後、楊培徳は貴州苗学会を代表して「ドラマ『炎黄二帝』の放映が引き起こしたミャオ族の強い不満について—ドラマ『炎黄二帝』に関する検討と提議総述」という報告書を書き、『炎黄二帝』を猛烈に批判した。氏はこの中で、蚩尤はミャオ族の祖先であり、中華文明の創建者の一人でもあるのに、『炎黄二帝』の中で蚩尤が歪曲化されており、また、一部の漢族の学者も蚩尤を低く評価しているのは、明らかに蚩尤を「中華文明」の創建者の列か

ら削除しようとする行為であり、中華民族が「多元一体」起源であるとする観点を事実上否定していると指摘し、「結果として必然的に、一体である中華文明を分裂させ、故意に中華文明の中で相互に排斥しあうような要因を創り、中華文明を創造しようとしている各民族の民族感情を損ない、中華民族の団結を傷つけることになる」と述べている。そして文章の最後で「ドラマ『炎黄二帝』の放映が人々をバラバラにしようとする力を生み出したことは、きっと次第に増大し、不満を蔓延させることになるだろう……(中略)……関係部門がこの問題を重視し、早急に悪影響を取り去るような手を打つことを希望する」と警告を発している³⁾。ここで、「中華民族多元一体格局」とは、中国の高名な社会学者で人類学者である費孝通によって、1988年に提唱された考え方で⁴⁾、①漢民族は歴史的に中国領域内で生きてきた諸民族の接触・混合・融合の複雑な過程を通して生まれ、「中華民族の凝集的」核心になっていった、②中国領域内の諸民族は多元的に形成されてきたが一体をなし、中華民族は多元一体である、③中華民族は「自然発生的な民族実体」として数千年前から徐々に作られ、19世紀半ばから列強と対抗する中で「自覚的な民族実体」になった、とする学説に基づいている。楊の書いた報告書は各レベルの政府に提出されただけでなく、苗学会の内部刊行物『苗学研究通讯』にも発表された。3月に第八次全国人民代表大会第五回全体会議が北京で開かれ、ここでミャオ族の全人大代表・伍略(ミャオ族作家)、張明達(貴州苗学会の幹部)はドラマ『炎黄二帝』問題に関し、中央に上書したのみならず、全人大代表の提案という形で『炎黄二帝』の表現について疑問を呈すると同時に、このドラマの蚩尤描写が少数民族の民族感情を著しく傷つけ、民族間の団結に悪影響を与えたと指摘した。この事件はついに上層部の注意を引くこととなり、この年の5月21日、広播電視部から第49号の『文件』(通告)の形でこの二人のミャオ族全人大代表宛に返書が送られてきた。その全文は以下の通りである。

第8回全国人大代表龍明伍(伍略)、張明達同志：

あなた方がテレビドラマ『炎黄二帝』について丁関根同志(当時、中央政治局常務委員、中央宣伝部部長一筆者注)に宛てた手紙は、関根同志と中央宣伝部内の関係する幹部が重く受け止め、これを我が部内で処理するよう指令が出されました。孫家正部長が直ちに指示を下し、我々編集室が中央宣伝辦公室の関連通知の趣旨に則り、あらためてラジオ局、テレビ局に対して今後「炎黄子孫」という言い回しを用いず、また『炎黄二帝』の再放送は行わず、同時に民族団結を強めるような宣伝をするよう通告しました。

我が編集室はすでにこの旨を、中央人民広播電台、中国国際広播電台、中央電視台に伝達しており、また、「通報」の形で全国の各広播電視庁(局)、ラジオ、テレビ各局に通達しています。中央電視台はすでに『炎黄二帝』の再放送は行わないとの決定をしています。民族問題は非常に厳粛で重要な問題であります。民族団結は国家統治の長い安定と各民族の長期的な利益に結びついています。我々は自分の目をいたわると同じように民族団結を愛護しなければなりません。党の民族政策を堅持し、その執行を貫徹させて民族団結の宣伝を強めて行かねばなりません。

あなた方の『炎黄二帝』に対するご意見は的を射たもので、我々にとって大いなる啓発と助力を与えてくれました。あなた方の放送事業に対する関心に感謝し、今後とも放送事業について貴重なご意見をお寄せいただけることを願っています。

重ねて御礼申し上げます。

広播電影電視総編室

1997年5月21日

伝送：丁関根同志、徐光春同志、孫家正部長⁹⁾

この「通告」の中で、上記のドラマを再放送しないことを約束する同時に、さらに重要なのは、この通告の中で今後政府系のメディアでは「炎黄子孫」という言い方をしないと明文化したことである。ただ、この政府からの文書が漢族社会の「炎黄ブーム」をコントロールできたかといえば、それは疑問である。というのも、これに続いて1999年にはドラマ『釜山大結盟』が放映され、ミャオ族知識人による抗議事件が発生したからである。

1999年の5月から6月にかけて、湖南電視台は河南新華分社などのいくつかの機関との合作による20回の連続ドラマ『釜山大結盟』を放映した。このドラマは『炎黄二帝』と同じく、上古時代の炎帝、黄帝、蚩尤の間に発生した阪泉の戦いと涿鹿の戦いを題材としたものであった。そして劇中における蚩尤の歪曲化された描写も『炎黄二帝』と同じ轍を踏んでいた。しかもこのドラマでは「大苗」「二苗」「三苗」と蚩尤をひとまとめにし、彼らが炎帝、黄帝の領土を侵犯するという筋書きになっており、蚩尤と「三苗」の関係が暗示される展開になっていた⁶⁾。このドラマの放映が始まると、すぐさまミャオ族社会から強烈な抗議の声が挙がった。ミャオ族の三大方言地域のミャオ族知識人が初めて一堂に会し、「全国各界ミャオ族人士及び蚩尤族団の名誉回復を求める委員会による連名抗議」と題した書名形式の抗議書を全国に向けて公開した。

抗議書では『釜山大結盟』におけるミャオ族の先祖である蚩尤の歪曲化は、「民族間の関係悪化を挑発し、民族間の怨恨を誘発し、民族精神を抹殺するものである」と指摘し、さらに漢族社会における「民族不平等」の現象について辛辣な批判を展開した。以下はこの抗議書の一部である。

『釜山大結盟』における中華民族の始祖に対する歪曲化、ミャオ族の始祖とその民に対する歪曲化に対して、関連部門が介入せず、その氾濫を見逃していることは、広くミャオ族同胞に不可解な思いを抱かせている。なぜ民族の団結、民族の共同繁栄、民族の平等という新しい形の民族関係を築いていこうとする時期に、このようなミャオ族を見下し、侮辱し、人権を侵害するような行為が現れるのであろうか。『釜山大結盟』の放映は、ミャオ族の先人が見下され、否定され、抹殺されるという状況がいまだに厳然と存在していることを明らかにした。例えば、現行の中学義務教育の初等中学の歴史教科書では、原始社会の部分で蚩尤の氏族の偉大な歴史的貢献についての記述が少しもなく、中華民族の子孫を教育するための書物『上下五千年』の作者も蚩尤の氏族については歪曲化し、否定的態度を示している……(中略)……。関連部門が『釜山大結盟』の政策と放映を許したということは、新たな中華民族の始祖の歪曲化、ミャオ族への歪曲と侮辱、精神的なミャオ族抹殺の試みが始まったことを体現するものであり、民族間の怨恨に導火線を引くことである！ このドラマの放映を許可した関連部門は「中華民族の平等」という新時代の原則を無視し、中華民族の燦然と輝く歴史が各民族の手によって共に創られてきたものであるという真実を無視し、中華人民共和国憲法第四条「民族の団結を破壊し、民族の分裂を招くことを禁止する」という条項に違反しているのである……。

この抗議書からは、ミャオ族知識人たちが「炎黄ブーム」のなかで絶えず見られた「炎黄を持ち上げ、蚩尤を貶める」現象に対し、すでに内心の怒りを抑えきれなくなっていることが見て取れる。彼らはこ

のドラマへの批判を通じ、「ミャオ族の人権侵犯」「民族団結の破壊」といった高度に政治的な問題にまで高め、さらに教育などの領域に存在するミャオ族の先人が「抹殺されている」状況に対しても強烈な不満を示した。ミャオ族からの強烈な抗議の中、『金山大結盟』は途中で放映打ちきりとなったが、彼らが望んだような政府側からの訂正や制作者への処罰などは行われなかったのである。

このように「炎黄子孫」が一種のブームになる中、一方では、蚩尤への評価を巡ってミャオ族社会からの不満の声が挙がり、抗議活動が展開しているが、その背景にあるのはどのようなものであったのか。私は、漢民族社会における「炎黄ブーム」とミャオ族社会における「蚩尤ブーム」が現れだした90年代初期に遡って論じる必要があると考えている。

2. 「炎黄ブーム」と「蚩尤ブーム」との軋轢

1990年代初期に、政治的困難の局面を打開し、中国国内及び世界各地の華僑華人の中国への求心力を増強するために、中国政府は全国範囲で大規模な「愛国主義教育キャンペーン」を展開した。「愛国主義」とは、ナショナリズムの中国語表現でもある。興味深いのは、今回の政治運動においては、90年代以前の政府のイデオロギーや主流メディアが一貫して「中華民族」を強調してきたとは異なり、20世紀初めごろに形成され、しかし新中国成立後は長い間、イデオロギーの領域において封印されてきた「炎黄子孫」というスローガンが再び提起され、しかも「愛国主義教育」の重要な内容の一つになったことである。それ以来、中国の漢民族社会及び世界各地の華人社会で「炎黄ブーム」が起り、今日に至っている。

1991年4月に北京で成立した「中華炎黄文化研究会」は、名義上は民間文化団体に過ぎなかったが、実際には中央上層部の大々的な支持を受けていた。例えばこの会の会長には周谷成、蕭克、費孝通、程思遠等が就任しているが、彼らの大半は中国の文学芸術、そして政治思想などの分野の「権威」とされる人たちであり、(特に周谷成、費孝通などは)中国政府のイデオロギーの領域や学術界でも重要な影響力を持っている人物であった。学会成立後、中国や香港などでも「炎黄二帝」をテーマとした様々な文化活動が開かれたが、この学会が近年の大陸各地で湧き起こった「炎黄ブーム」の最も重要な中核的存在となってきた。さらに、この学会は多くの「炎黄」をテーマにした出版物、例えば400万字にもものぼる膨大な資料集『炎黄彙編』や百巻を超える『中華文化通志』(1998年)などを編纂している。これらの活動はいずれも中央や地方各レベルの政府の官僚の直接的、間接的な支持と協力を得ている。中でも『中華文化通志』が出版された直後の1998年11月には、この学会の幹部やこの本の執筆者、編集者の一部が江沢民総書記の接見を受けている⁷⁾。2000年8月、オリンピック大会の招致運動に合わせるため、国务院の許可を受け、外交部、公安部、国家体育总局、交通部、中国僑聯と国家旅遊局の共催で空前の規模の「全国炎黄千年祭祀賀行事「普天炎黄賀千年」が開かれ、全国を東西南北に分け、複数のルートからなる「中華炎黄聖火」の点火とリレーが行われた⁸⁾。2004年に、黄帝陵(陝西省)への祭祀活動は国家レベルの「公祭」まで昇格されたという⁹⁾。このように、90年代に入ってから始まった「炎黄ブーム」ではその背後に政府の推進及び援助があったことが分かる。

しかし、皮肉なのは、漢族社会における「炎黄ブーム」とほぼ同じ時期、主に中国南方に分布する少数民族、特にミャオ族社会において、中国古代伝説で炎帝、黄帝と対立する人物とされる蚩尤を「民族の共通祖先」に奉じる動きも現れ、この「蚩尤ブーム」が次第に漢族社会の「炎黄ブーム」と軋轢を起し、衝突することになった。

1994年、古代において炎黄連盟と蚩尤との間で起きた「涿鹿大戦」の戦場とされた河北省涿鹿県では、県政府が当時流行していた「炎黄ブーム」を利用し、現地における「炎黄像」の建設や「炎黄城」の修築計画を決定し、それを観光業開発の呼び水にしようとした。当時、南京軍区にいたミャオ族出身の陳靖將軍はこのニュースを聞き、すぐに現地の県党委員会と県政府の指導者に一通の長い手紙を書き、この行為に対して憂慮と反対を表明し、この行為は中国の民族的団結を破壊するものであり、最悪の場合、一部の少数民族の「離心」を招くような「結果」になると警告した。近年流行している「炎黄ブーム」に対して、彼は手紙の中で以下のように書いている。

ここ4,5年、ある人々とある指導者が目先の一時的な需要に気をとられ、孤立的に、一方的に起こした所謂「炎黄ブーム」は、その他50あまりの少数民族を軽視し、無意識に民族間の不和を醸成しています。少なくとも10余りの少数民族の中で、「離心」が生じつつあります。我々は彼らの中、下層（少数の上層も）の中において、しばしば「我々は炎黄子孫ではない」「そのような炎黄ブームを煽る人が、何を考えているのかわからない……」という言葉を目にします。ある民族の責任者は、すでに中央部門、さらには中央指導者に対して直接意見具申しているそうです¹⁰⁾。

陳靖は続いて1995年3月から5月までの間に、「苗族老紅軍戦士」という名義で、蚩尤問題に関し、当時の中国社会科学院院長、中国の著名なマルクス主義理論家の胡繩、中共中央政治局委員であり政治協商会議主席である李瑞環や、中華炎黄研究会執行会長の肖克將軍などの機関や個人にそれぞれ手紙を出し、「ミャオ族の最高祖先」と見なされている蚩尤の「名誉回復」を要求した。これらの手紙の中で、彼は十分に近年の苗学研究成果を踏まえ、「蚩尤」や「九黎」、「三苗」とミャオ族の起源関係を詳述し、漢民族の形成過程を遡るという作業を通して、「蚩尤はミャオ族の始祖であり、また漢族の始祖でもある」とし、王朝時代から民国時代の漢文化が持っていた「正統観念」によって蚩尤を不公平に扱う態度に反駁した。また、新中国成立以降、かつて侮蔑され、歪曲されていた多くの歴史事件あるいは歴史人物、例えば「闖賊」(李自成)や「拳匪」(義和団運動)、「洪逆」(太平天国の洪秀全)などは次々と名誉を回復したが、唯一蚩尤だけがかの外におかれたままであったことを指摘している。このように彼は「ここ数年」で登場した「炎黄ブーム」への不満や批判を表明している。近年の「炎黄ブーム」に関して、陳靖は胡繩と肖克への手紙の中でも、彼が涿鹿県長への手紙に書いたものと基本的に同様の反対理由を列挙して、単に目先の「需要」を満足させるためだけに巻き起こった「炎黄ブーム」は、南方の20あまりの少数民族に「離心」を生じさせていると指摘した。

陳の上申書に対して、中央上層部はこの手紙を関係部門に転送して処理させただけで、直接態度を示さなかった。当時「中華炎黄研究会」の執行会長であった肖克は、学会内部の異論に遠慮し、退任の際に夫人を通じて陳に電話をし、彼の手紙に対して支持と理解を示しただけであったが、地方においては現地政府部門の強い関心を引いた。涿鹿県は陳靖の手紙を受け取った後、涿鹿県政府はすぐさま元の計画を撤回し、代わりに「炎帝、黄帝、蚩尤」を共に中華民族の「三大祖先」に樹立する「三祖文化」という構想を提示した。

陳靖のこの蚩尤の「名誉回復」を要求する中央への上申書は、内外で大きな反響を引き起こした。というのは、かれは軍隊の高級幹部であり、少数民族であるという二重の身分を有し、普通の「群衆からの来信」と区別されただけではなく、彼の上申書の中で指摘された20あまりの少数民族の中で生じた

「離心」現象は、中国の政治生活の中で最も敏感になった民族問題に抵触していたためである。この現状へ彼のはばかりのない批判と、中央に直接上書した勇氣とは、ミャオ族出身の幹部や学者から広く尊敬と共鳴を得た。彼の手紙は苗学会の内部に広く知られところとなっただけではなく、一部のミャオ族の幹部や学者の中には自費でこれをコピーして各地のミャオ族社会に配布する者もいた。そして、この上申書をきっかけに、1995年以降、各地のミャオ族社会の知識人の間で「蚩尤ブーム」が起こり、「炎黄ブーム」とは明らかに異なる動きが展開していくのである。

ミャオ族（中国語：苗族，英語表記：Hmong）は中国南方の貴州省、雲南省、四川省南部、湖南省西部、湖北省南部、広西壮（チワン）族自治区西部及び東南アジアの各地などに広く分布している民族である。2000年度の人口調査によると、中国国内のミャオ族人口は894万116人で、中国の56の民族（漢民族を含む）の中で、人口規模は第5位を占めている。80年代に入り、改革開放政策が実施され、民族政策が正常化されると、中国の各少数民族社会における民族的アイデンティティーの高揚が見られるようになり、ミャオ族社会でも知識人たちがさまざまな形で民族的アイデンティティーを向上させるための活動を展開してきた。1989年11月、ミャオ族の人口が最も多い貴州省では、初めてミャオ族知識人を中心とする民間組織である貴州省苗学研究会（以下、貴州苗学会と略す）を設立し、その後、湖南省、雲南省、広西壮族自治区及び北京市などで、続々と苗学研究組織が成立することになった。各地の苗学会の成立に伴って、「苗学研究」のもとで、ミャオ族社会の知識人たちはミャオ族社会の経済、教育などの領域に取り組んで研究を展開しながら、自民族の歴史構成及び「伝統文化」に対しても発掘、収集、整理、再解釈などの作業を行い、多くの成果を上げた。ただし、蚩尤問題に関しては、1989年に出版された『蚩尤的伝説』（編者潘定衡等、貴州民族出版社刊）以外、陳靖の上申書が出るまでは、「苗学研究」においてもあまり注目されず、この問題に触れたものはほとんどなかった。

しかし、上述の陳靖の上申書をきっかけに、1995年以降、「蚩尤問題」はたちまち各地の苗学会の共通の関心テーマになった。そのなか、ミャオ族人口がもっとも分布する貴州省（約420万人）では、1995年11月に貴州省安順市で行われた貴州省苗学会第三回代表大会において、伝説上の古代黄帝と蚩尤との間で「涿鹿大戦」が起こり、それに敗北した蚩尤が殺された場所にあたる河北省涿鹿県の県党委員会書記をゲストに招き、蚩尤と中華民族との関係について参加者から次々に発言がなされた¹¹⁾。ついで、1996年8月、貴州六盤水で開催された「貴州省苗学会第五次年会及び経済貿易懇談会」においても、蚩尤問題が事実上会議の主題となった。『貴州民族報』では「蚩尤始祖地位応肯定—貴州省苗学会第五次年会学術研討綜述」と題して、その会議の状況を報じた¹²⁾。貴州黔東方言区出身の李廷貴や潘定智（貴州民族学院民族言語学部部長）、湖南湘西方言区の伍新福（『苗族史』及び『苗族通史』の著者）、西部方言区の王正義などのような、三大方言区の著名なミャオ族学者たちは、様々な異なる角度から蚩尤とミャオ族の関係を論議した。彼ら以外に、河北省涿鹿県の王大有など、蚩尤の「名誉回復」要求に賛同した漢族学者たちもこの討論に参加した¹³⁾。この「蚩尤ブーム」は急速に貴州から全国各地の苗学会に広まり、貴州や湖南、北京、雲南などの苗学会は申し合わせたかのように蚩尤をミャオ族の共同祖先として確立することを重要議題に挙げた。1996年以降、貴州省苗学会の内部刊行物である『苗学研究通訊』には、第10期（1999年）『苗族傑出人物』を除き、毎号に沢山の蚩尤に関する論文や情報が掲載されており、ほとんど蚩尤問題に関する「特集号」に変わってしまったかのようであった。

全国各地のミャオ族のウェブサイトでも次々と蚩尤に関する内容が取りあげられている。中でも北京の中央民族大学と中国社会科学院民族研究所のミャオ族の若手研究者たちが開設した「三苗網」（ネット

ワーク)には、蚩尤問題を中心議題にする「祭祖壇」が設けられ、ミャオ族の芸術家が描いた蚩尤の画像を掲げて、多くのミャオ族学者(少数の漢族学者を含む)の蚩尤に関する問題の論文や研究資料を列挙している。さらにこのサイトの「苗学論壇」でも、蚩尤問題は皆が関心を寄せる議題の一つとなっている¹⁴⁾

以上の蚩尤に関する一連の活発な議論には、二つの重要なテーマが含まれていた。一つは学術的に蚩尤とミャオ族の関係を論証することにより、「内」なるミャオ族社会において、蚩尤をミャオ族の「共通の祖先」として樹立することであり、二つ目は「外」なる主流社会(漢族社会)に対して、蚩尤の再評価を求め、蚩尤を中国史における「中華民族」の創始者として認めさせることであった。

まず、蚩尤とミャオ族との関係については、蚩尤は中国古代伝説時代の人物であり、伝説によると、彼は黄帝との戦争に負けはしたが、長い間、中国の国家権力及び漢民族社会から、「戦争の神」として崇拜されてきた。『史記』によれば、始皇帝は中国統一を遂げてから、泰山で八つの神を祭る際、蚩尤が「兵主」(戦争を司る神)として取り上げられた。また、秦朝末期、漢の創立者である劉邦が兵を起す前、蚩尤を祭る儀式を行い、その後、漢の王朝の成立に伴い、「蚩尤旗」も国家軍隊の旗になったという¹⁵⁾。しかし、20世紀の初めごろに起こった漢民族による「排満興漢」のスローガンを掲げた民族主義運動のなか、漢民族が「炎帝・黄帝の子孫」であるという言説が生まれ、間もなく革命の成功により定着するようになった。この言説のなかで、過去に炎帝と黄帝の対立者でありながらも、「神」として祭られてきた蚩尤は「文明」と対照的な「野蛮」な存在に一変しただけではなく、漢民族と出会う最初の異族「苗族」(ミャオ族)の指導者にされた¹⁶⁾。

新中国が成立して以降、80年代初期にかけてまで、ミャオ族の民族源流に関する議論は、主に「三苗説」と「武陵説」とが対立しながら展開されてきたが、蚩尤との関連にはほとんど触れられることはなかった。このような状況は1986年に『苗族簡史』が公式に出版され、民族源流についてミャオ族学者の要求に応じて「三苗説」が採用されたため、初めて蚩尤とミャオ族との関係が問題関心として浮上してきた。ところが、この時期には蚩尤とミャオ族との関係についての論文はまだほとんど見当たらなかった。

95年以降に起きた「蚩尤ブーム」において、蚩尤とミャオ族の関係についての論文が多く発表されたが、これらの研究論文を概観すると、先秦時代の漢籍史料で蚩尤とミャオ族との関係を裏付ける資料は事実上以下の二つに限定されている。一つは『国語』や『礼記』などの史料にある「三苗」が「九黎の後裔」であるという記載から、間接的にミャオ族と「九黎」の指導者である蚩尤との関係が見えてくるという点である。二つ目は『山海経』などの史料で、蚩尤が棄てた「手枷足枷(桎梏)」が「楓林になった」という記載であり、それが現在貴州省黔東南一帯のミャオ族地区で見られる楓香樹信仰(楓香樹はマンサク科の樹木)との関連性を示す有力な証拠として見なされていることである。言い換えれば、漢文献に記載されている歴史——いわゆる「書史」だけに頼っては蚩尤をミャオ族の祖先だと明確に証明することはできない。ミャオ族の学者たちは、如何にして「学術的に」蚩尤をミャオ族の祖先だと証明できるか、という問題にぶつかったが、この難題を解決する試みとして登場したのがミャオ族の「心性史」であった。

貴州省苗学会初代会長を務めた李廷貴(元貴州民族学院代理院長)の話によれば、いわゆる「心性史」とはミャオ族の「心霊の歴史」であり、すなわち、各地のミャオ族社会で伝えられてきたさまざまな民間伝承ということであった¹⁷⁾。ただし、80年代以前に整理された多くのミャオ族の古歌や叙事詩などの

民間伝承の中には、基本的に蚩尤伝説に関する内容は見当たらない。これは貴州の民間文芸研究室が編纂した70集あまり（その中でミャオ族に関するものは3分の2近くを占める）の民間文学資料集を見てもそうである。西部方言の中には蚩尤の伝説が広く伝わっていたと言われているが、1987年に出版された、50年代の調査資料を整理した『雲南苗族瑶族社会歴史調査報告』の中にも直接的に蚩尤とミャオ族の関係を証明するような記述は見当たらない。しかし、80年代に入ってから、『苗族簡史』の定稿過程において、貴州民族研究所の所長を勤めたミャオ族出身の楊漢先が整理発表した『貴州威寧苗族古史伝説』の中の「格龍爺老」に関する叙述に基づき、この言葉を「蚩尤」と直訳したことによって、ミャオ族の「心性史」に関する資料が蚩尤と関連づけられるようになった¹⁸⁾。80年代後半から、蚩尤をミャオ族の共通の祖先として再確認しようとする動きが現れ始めたことにより、ミャオ族社会の中で流布していた「蚩尤」に関する民間伝承は、次々とミャオ族知識人たちの「発掘」により収集整理された。これらの「蚩尤」に関する多くの民間伝承は、漢文献に取って代わって蚩尤をミャオ族の祖先と証明するさいの最有力の「証拠」になっていった。

一方、対外的には、蚩尤の中国史における地位を再評価するように要求し、彼の「中華文明」の創立者、及び「中華民族」の始祖としての地位を求めている。これはいわゆる蚩尤の「平反」（名誉回復）であり、「蚩尤ブーム」における重要な動きの一つである。

90年代以降における「炎黄ブーム」において、「炎黄子孫」が大いに喧伝される一方、その敵である蚩尤に対しては、少数民族社会からの反発を考慮しながらも、回避、無視、あるいは黙殺された。このような「炎黄を重んじ、蚩尤を軽んずる」、あるいは「炎黄を褒め、蚩尤を貶める」という言説は、ミャオ族社会の知識人たちの不満と反発を招いた。1995年以降のミャオ族社会に見られた「蚩尤ブーム」において、蚩尤の中華民族に対する貢献、また蚩尤の中国史における再評価が、「苗学研究」の重要なテーマとなり、各地の苗学会の重要な議題となった。

興味深いのは、蚩尤の再評価は直接的に少数民族の国家に対する帰属意識や「安定団結」という大局に関係しており、初めから既に「学術」の境界線を越え、高度に政治的で、敏感な問題になっていたといえよう。「炎黄ブーム」の流行後、陳靖の上申書とほとんど同じ時期に、蚩尤の歴史的地位の再評価をめぐる動きが、一部のイデオロギー部門を主管する政府関係者や漢族の学者の中から現れた。北京の首都社会経済発展研究所の漢族学者であり、現在当研究所副所長である李庚によれば、彼は1993年、涿鹿県での炎帝や黄帝、蚩尤に関する文化遺跡を調査している間に、すでに伝統史学が炎黄についてのみ言及し、蚩尤を取り上げない歴史観の「限界」を意識し始めていたという。そこで1994年4月、彼は涿鹿県政府に、蚩尤を中華の始祖として炎帝や黄帝と同列にするという「中華始祖文化村」の建設構想を提案した。彼によれば、彼の発想は当時国家旅行局長や専門家たちの賛同を得たという¹⁹⁾。

また、河北省涿鹿県県党委員会副書記・任昌華の回顧によれば、いわゆる「炎、黄、蚩の三祖文化」という視点は、彼が1993年10月に最初に提示したものであったという。その後、彼の発言は地区や省レベルの党委員会宣伝部門を主管する官員の賛同を得、さらに中国先秦史学会や中華炎黄研究会、台湾中華倫理教育学会のような、国内の学術団体の責任者や学者の支持も得た²⁰⁾。ミャオ族学者が蚩尤の「名誉回復」を要求する呼びかけを行う中、北京大学の段宝林教授や首都社会経済発展研究所の李庚、歴史学者王大有などの漢族学者たちも次々に文章を発表し、蚩尤の歴史的な貢献を評価し、蚩尤に対する評価刷新を民族団結維持のために必要だとし、蚩尤の中華民族の始祖としての地位を肯定しており、ミャオ族学者と相互に呼応していた。

1995年9月、涿鹿県政府の主導の下で、涿鹿県において「全国第一回涿鹿炎黄蚩三祖文化学術研討会」が開催され、全国から40人余りの専門家及び党の宣伝部門・政府の観光部門の責任者らがこの会議に参加し、蚩尤が歴史上炎帝や黄帝と同じく「中華始祖」の地位にあることを認めた。また、この会議が元になって「三祖文化研究会」という学術団体が成立した²¹⁾。さらに1997年、涿鹿県に「中華民族」の起源を象徴する「中華三祖堂」が建設され、その記念碑的建築物の中には、「炎帝」と「黄帝」、「蚩尤」という「中華民族」の起源を代表する祖先の像が並べられた。1998年7月には再び涿鹿県において「全国第二回涿鹿三祖文化学術研究討論会」が開催された。国内の学術団体や学者以外に、アメリカやラオスの華人やモン族（ミャオ族）の代表を含む全部で300名以上が出席した。この研究討論会では貴州苗学会常務副会長・李廷貴が会議を代表して開会の挨拶を行い、さらに会議期間中に、「中華三祖堂」記念館の落成を記念して盛大な開館儀式が行われ、元貴州省長で、後に全国人民代表大会民族委員会主任となり、貴州苗学会会長を兼任した王朝文が祝辞を述べた。その後、盛大に開館を祝う行事の中で、貴州省赫章県などから来たミャオ族の蘆笙隊や貴州苗学会が組織したミャオ族の歌舞団や芸術家が、民族衣装に身を包み、華やかなショーを披露した。「蚩尤の子孫の代表」であるミャオ族が参加したことが、この研究討論会や「中華三祖堂」の開館儀式の中で最も人々の注目を集めた²²⁾。

しかし、このようなミャオ族社会及び一部の漢族学者と政府機関による炎帝、黄帝、蚩尤を「中華民族の三大始祖」に樹立させようとする動きは、近年高揚し続けている「炎黄ブーム」に比べると、ほんの一コマのエピソードにしか過ぎないかもしれない。なぜなら、ミャオ族社会からの蚩尤の「名義回復」の呼びかけに対し、目に見えるか見えないかは別にして、「主流社会」からの反発がたえずあったからである。陳靖によれば、多くの漢族の学者は非公開の場では皆、蚩尤の「名誉回復」は絶対に不可能であると言明していたという。中には孫文が1912年に黄帝陵の祭祀の時に書いた著名な祭文を蚩尤を否定する根拠にする者すらいた²³⁾。さらに「三祖文化」の概念が提起され、関係する研究会が開かれ、蚩尤の「名誉回復」の動向が表面化するにしたがって、漢族社会の「正統観念」による抵抗も公然化するようになった。90年代後期に続々と登場した連続テレビドラマ『炎黄二帝』と『釜山大結盟』は、漢族社会からのこういう不満を反映したものであるともいえよう。このことは中国国内で制作され、現在爆発的な人気を誇るオンラインゲーム『軒轅剣』の中で、「蚩尤」がやはり最大の「魔王」とされていることからもうかがい知ることができる²⁴⁾。この意味で言えば、中国のミャオ族が蚩尤の「名誉回復」を通して中国という巨大な国家の中で平等の地位を得るということは、未だに非常に困難な局面に直面しているといえよう。

以上、漢族社会とミャオ族社会でほぼ同時期に起こった「炎黄ブーム」と「蚩尤ブーム」の間の軋轢について論じたが、その背後にはもっと深い歴史的要因があり、この問題は近代中国が王朝体制から国民国家体制に転換する過程で、国民国家としての統合を進める中で形成されてきた「炎黄子孫」と「中華民族」という異なる二つの言説が深く関わっているのである。以下、この二つの言説について若干の整理、分析を行いたい。

3. 「炎黄子孫」と「中華民族」の言説

20世紀初めから清王朝の統治を覆えそうとして始まった近代中国の革命は、当初は「排満興漢」をスローガンとしていた。中国を統治していた満州族の清政権は「異民族統治」というレッテルを貼られたのである。革命派の間で、清政権を倒すための議論において「黄帝」を「漢種」あるいは「漢族」の始

祖であるとする言説が徐々に流布していった。しかし1912年の辛亥革命によって「中華民国」が成立すると、かつての清帝国の版図がそのまま変わらずに継承されることとなった。「中国」という国家領域内には多くの民族が存在しているという現実と直面し、革命前に形成された「炎黄子孫」という単一種族主義思想は明らかに新しい国家の現実的な需要に適応できなくなっていた。孫文が「五族共和」（漢・満州・蒙古・回・蔵の各民族の団結）の思想を提起し、国民統合という意味での「中華民族」の概念を作り出したのは、このような背景があったからなのである²⁵⁾。しかし、この時期の「中華民族」の概念は基本的には漢族と漢文化による中国のその他非漢系族群の同化を中心的な理念としていた。「炎黄子孫」及び「中華民族」という二つの概念は表面では異なるものではあったが、漢文化を中心とする「大漢族主義」であるという点ではあまり変わらないともいえよう。

この二つの言説の中には「拡張性」と「収斂性」、及び「伝統」と「近代」といった対照的な概念が表されている。まず「拡張性」と「収斂性」の関係で言えば、「炎黄子孫」という言説は中華民国建国以前の「排滿興漢」の反清運動の過程で形成されたもので、ここで強調されるのは「共通の祖先」或いは「種族」の関係が「国家」の境界線を超えるということであった。この言説が生まれ、流伝していったのは、まず海外の留学生や華僑の間であり、したがってこの言説が影響を持ち、普遍的な賛同を得たのは海外の華人の中でのことであった²⁶⁾。一方「中華民族（五族共和）」は「中国」という主権国家内の異なる族群を統合することを目的に提起された概念であり、国家内部の異なる族群が国家への帰属に同意することができることを主眼としていたのであって、内側に収斂していこうとする傾向は明らかであった。この点に関しては、1990年代に入って急速に展開し始めた新たなナショナリズムの動きを背景とした「中華民族」の言説とは異なっていた。

次に、「伝統」と「近代」ということでいえば、「炎黄子孫」のスローガンは決して単純に「共通の祖先」のことだけを表す言説ではなく、伝統的な「天下」の概念や儒教道徳を主軸とする漢文化の価値観の継承と発展のもとにある言説でもあった。すなわち、近代中国の歴史において、内憂外患の局面にあって王朝体制が国民国家体制へと転換してゆく過程では、近代国家の明確な国境線の概念であるとか、民族（国民）意識や主権在民の思想などが徐々に過去の朝貢体制下の宗主権思想や君主中心の王権思想などに取って代わっていった一方で、「炎黄子孫」等の種族主義の言説の展開を通して、伝統的な、王朝時代の儒教文化の価値観に基づいた「華夷の辨」や「天下」の概念もまた拡張し変化を遂げていることが分かるのである²⁷⁾。かつて「教化の届かぬ民」とされた海外の華人はこの言説のもとで文化的な意味での「中華」の範囲に有機的につながれた。海外の華人は空間的には世界各地に散らばっていたが、彼らのアイデンティティーは「中国」と一体化しており、彼らは辛亥革命前の反清運動を大いに支持し、孫文から「革命の母」と称賛を受けたのである。同じように中国国内の人々も海外の華人に強烈な連帯感を抱いており、例えば、民族の存亡の危機にさらされていた中日戦争の時期に、人々は「辺境」問題の検討にあたってしばしばこの「辺境」という概念を「政治的辺境」と「文化的辺境」という二つのレベルに分けて考えていた。前者は主に主権国家としての「中国」の統治範囲を指していたが、後者はかつて文化的に「他者」と見なされた「中国」という国民国家内の非漢系族群のみならず、過去に王朝政権から「夷狄」と同一視された海外華人をも含んでいたのである。1942年に民族学者の呉文藻が発表した論文の中で「中国国内の『辺胞（辺境地区に分布する非漢系族群）』は『国防の前線』として中国の『有形の辺境』を代表しているに過ぎないが、世界各地に散在する華人は『国防の外郭』であって中国の『無形の辺境』を代表しているのである」と指摘しているが、彼がここで提起する「有形の辺境」と「無

形の辺境」というのは「政治的中国」と「文化的中国」の二つの形態としても理解できよう。これらは実際には近代的な「国家」と伝統的な「天下」の概念の両方を含んでいるのである²⁸⁾。

この「政治的辺境」と「文化的辺境」の観点にせよ、「中華民族」と「炎黄子孫」という表現にせよ、両者の間には実際にはかなり重なり合う部分がある。そこには、近代以降中国が王朝体制から近代国家へと転換してゆく過程で、実は二つの異なる統合の言説が貫かれていたことが見て取れる。一つは「中華民族」のスローガンが代表する「国民の」統合の言説である。これは基本的には「中国」という主権国家を前提にして、その国内にある各民族を統合対象として展開されたものである。もう一つは「炎黄子孫」という言説を中心に展開した国境を越えた「文化の」統合の言説である。これは表面的には「共通の祖先」という想像を紐帯としていたが、実際には漢字と伝統的な儒教文化に基づいて形成された共通の価値観を核とし、全世界に分布する華人を一つの共同体とするものであった。しかし長きに渡り「漢文化中心主義」の影響でこの両者は厳格に区別されることはないままであった。多くの場合、「中華民族」は中国国境内の各民族を指すだけでなく、世界各地の華人も包括していたのである（しかし、中国少数民族の国外の部分は、例えばミャオ族、朝鮮族などを、「中華民族」の一員である「海外華僑」と言えるか、未だに、明確な回答が見られない）。そのためであろうか、1990年代になって起こってきた「炎黄ブーム」においてもしばしば「炎黄子孫」と「中華民族」が同じものとして見なされたのである。

もっとも、中華人民共和国成立後しばらくの間、「炎黄子孫」という言説が語られることはほとんどなかった。それは中国が当時国際的に孤立していたという外部環境に加え、政府のイデオロギーであるマルクスレーニン主義に基づく民族平等の理念も影響していたものと考えられる。また、文化大革命の時期には実際の政策面で海外の華人や華僑にはほとんど敵視に近い態度を採っていた（例えば、この時期には「海外との関係」を持っているということだけで政治問題になったくらいである）。したがって、1980年代以前の中国というのは、基本的には「国家」を中心に国民を統合する過程にあったと理解してよいだろう。改革開放は1978年に始まったが、このような状況は80年代初期まで続き、その後ようやく変化が起こった。民族政策の回復と対外的な改革開放政策の実施で、「民族」が復活し伝統回帰運動の活性化にともない、チベットや新疆での民族分裂活動が活発化したことにも顕著に現れているように（これらは一つの極端な例に過ぎないにしても）、中国国内の少数民族の民族意識は日に日に高まりを見せていったのである。一方、海外の華僑からの投資が徐々に増加するようになり、また、台湾の独立問題や、香港・マカオの返還問題などが取りざたされるようになると、中国政府は如何にして中国国内の各民族と国外の華人、ひいては香港、マカオ、そして台湾の人々の国家と民族への求心力と連帯感を強めていくべきか、ということが最重要課題となったのである。90年代初期から、中国政府は大々的に「愛国主義教育キャンペーン」を盛り上げていった。注目すべき事に、この運動の中で「炎黄子孫」という濃厚に文化主義の色彩を帯びたスローガンが再び登場してきたのである。

90年代に「愛国主義教育キャンペーン」という民族主義の傾向が色濃い政治運動が発生した原因は、いうまでもなく、89年に起こった天安門事件以降、政府が「内外の困難」に直面していたことと深く関わっている。だが、「炎黄ブーム」の登場はもっと深い意味を持つと思われる。これはイデオロギー上の「マルクス主義」から伝統的「中華文明」思想への回帰ともいえよう。「炎黄子孫」という言説が展開してゆく過程で、漢民族社会に深く根を下ろした伝統的な「大漢族主義」が不可避的に台頭してきていることが分かる。そして「炎黄子孫」と「中華」とは同等のものとして捉えられるようになってきているのである。例えば「中華炎黄研究会」の常務副会長魯淳はある発言の中で次のように述べている。「今日

の中国は古代中国の延長線上に発展してきたのであり、今日の中国文化も古代中国の文化の延長線上に発展してきたのであります。我々は中国の特色ある社会主義文化を築かねばなりません、それには炎黄二帝に始まり、彼らに代表される中華文化を理解することが必須であります。中華文化の多くの優れた伝統は炎黄二帝とその時代にまで遡ることができます……(中略)……古今の源流は五、六千年の時を隔てていますが、脈々と続いてきているものなのです²⁹⁾。このようにかつては「中華民族」はその「多元一体構造」が強調されてきたのが、「炎黄子孫」の言説が展開していく中で「一元一体」へと変化し、「炎黄二帝」もまた「中華」の起源にして主体となった。そして「炎黄文化」は「中華文化」の代名詞となったのである。すなわち「中華民族」は「炎黄子孫」と等しい言葉となった。この場合の「中華民族」とは、費孝通によって、1988年に提唱された「中華民族多元一体格局」の考え方の影響を受けてはいたが、恣意的に変質したといえる。

このような「中華民族」と「炎黄子孫」を混同するような観点は、ミャオ族の学者から典型的な「大漢族主義」、「正統観」の現れであるとして批判された。実際、この濃厚に政治的、種族(或いは文化)主義的色彩を帯びた概念は互いに補いがたい矛盾を含んでいるが、そもそもこの二つの概念自体がそれぞれ矛盾を抱えてもいる。例えば、費孝通により提起された「古来より多元一体構造を持っていた」という「中華民族」の概念は、一部の学者がすでに批判しているように、海外に住む漢族を包括してゆく一方で、「中華民族」の一員と見なされている国境を越えて居住する少数民族たちの国境外の人々については「中華民族」から排除している³⁰⁾。また、「炎黄子孫」は「共通の祖先」を基礎として作り上げられた「想像の共同体」imagined community (B. Anderson) であるが、それを「中華民族」と同一視することは、事実上公式的な「中華民族」を「多元一体構造」であるとする定義を否定することになり、間違いなく少数民族の反発を引き起こし、政治上の不安を生み出すことになるのである。

実際のところ、「愛国主義教育キャンペーン」が始まった頃は「中華民族」と「炎黄子孫」という二つの言説の間のこの微妙な区別には、政府側も意識していなかったわけではない。江沢民総書記は1990年のある講話の中では「我々はみな中華民族の子孫である。私は中央で仕事をするようになってから、全体の立場からいくつかの問題について研究してきた。私の感想では「中華民族」という言葉は我々がかつてよく言っていた「炎黄子孫」という言葉よりも含意が広く、我々の国家の各民族をも含むものである³¹⁾。ここでは、江沢民が明らかに中国の漢民族以外の少数民族の問題を意識してこの発言をしたと読み取られる。その後テレビドラマ『炎黄二帝』がミャオ族社会からの抗議を受けると、中央部門はメディアで『炎黄子孫』という言い方を用いることを制限するよう文書で規定したが、それでも漢族社会の「炎黄ブーム」が加熱していくことを阻止することは困難であったようだ。一方的に「炎黄」を喧伝したことで生じた負の効果については、中華炎黄文化研究会もただ内部文書で「炎黄」を語るときは少数民族の感情にも配慮しなければならない、などと述べているだけである³²⁾。

伝説の中で炎黄二帝の対立面に置かれた蚩尤は、ここで明らかに漢族とは区別された存在とされ、「少数民族」陣営の側に置かれた。すなわち、ミャオ族社会における「蚩尤ブーム」と漢族社会における「炎黄ブーム」が競って展開されてゆく中で、これらは事実上伝統的な「華」と「夷」、そして近代以来の「国家(中華民族)」と「民族(炎黄子孫)」という二つの異なる統合言説の間にある衝突を象徴的に表しているのである。ミャオ族社会の知識人たちは多くの場で「私は中国人であるが、炎黄子孫ではない」と宣言し、「炎黄ブーム」のなかで「炎黄が褒めそやされ、蚩尤が抑圧される」状況に強い不満を表明してきた。ドラマ『炎黄二帝』がミャオ族からの反対をも顧みず放映され、しかもミャオ族が自らの始祖

と考えている蚩尤を対立する側においたのは、まさに広播電視部長孫家正が『文芸報』で発表した評論で「この物語を作ったのは人々の願望を満足させ、全世界の華人の感情と心理に沿うためである」と述べているように、このドラマは中国と全世界に住む漢族あるいは華人の民族感情の必要を満たすために編集されたからなのである。したがって90年代におこった「愛国主義教育」とは実質的には漢文化を中心とする漢民族の「民族精神」を発揚することを主旨とした運動であったということができよう。この運動の中で、同じ「中国人」であるとされてきた国内の少数民族は、ミャオ族の知識人が公に抗議をした以外は、通例とは異なり概ね冷淡で、「一方は熱く一方は冷淡」な状況であった。

これらの状況は政治的不安定を招くとの見地から、先にも述べたように、政府や漢族社会の一部の有識者の間では「三祖共立」の観点から対立の溝を埋めようとする試みも見られたが、以下で述べるようにドラマ『涿鹿大戦』の放映がお流れになったことから分かるように、この努力も伝統的な「正統観」からの強い抵抗を受けることになったのである。

4. テレビドラマ『涿鹿大戦』の流産と「南長城点火」

ドラマ『炎黄二帝』が撮影されていたのとはほぼ同時期に、やはり「中華炎黄研究会」内部で同じ歴史を題材にしたもう一つの連続ドラマ『涿鹿大戦』の制作が準備されていた、という事実は非常に興味深い。このドラマも炎帝、黄帝の連盟と蚩尤との戦争という歴史を題材にしたものであったが、こちらのドラマの脚本は物語のテーマや内容の面で、『炎黄二帝』とは正反対であり、鮮明な対比をなしていたのである。

『炎黄二帝』における野蛮で暴虐な蚩尤の人物像とは異なり、『涿鹿大戦』ではこの五千年前の大きな戦いを描くに当たり、一人も悪役を作らなかった。このことについて、最初に「中華炎黄文化研究会」の委託を受けて脚本の創作に当たった黄谷子（漢族）は、その創作構想について貴州苗学会宛にする手紙の中で以下のように記している。

「もし人々が伝統的な歴史の偏見と狭隘な民族意識を捨て、国家統合と民族の大家族としての団結を守るという全体の利益から出発するなら、唯物史観から涿鹿大戦を捉えることで全く新しい歴史概念を作り出すことができるだろう。すなわち『涿鹿大戦』は我が国の原始部落文化における最初の大衝突であり、中華民族の歴史上最初の民族大融合だったのである……中略……我々は五千年前の祖先たちの勝敗に慰めを得たり、恨みを持ったりすべきではない。」³³⁾

まさにこの「民族の団結を守る」という観点に立ち、作者はこの伝統的には「文明」と「野蛮」の対立と見なされてきた戦いに対し、「融合」の角度から根本的な概念を覆すような再創作を試みたのである。1996年、このドラマの脚本の初稿が完成し、1997年には北京の釣魚台国賓館で研討会が開かれて、20人以上の将軍と200人以上の学者が参加したという。通常は国家の高級幹部か外国の首脳級の貴賓を接待するためにしか使われない釣魚台国賓館という場所で会議が開かれたことや、参加人数の規模から言って、この研討会の重要度は決して低いものではなかった。その後『炎黄二帝』がミャオ族社会に抗議の嵐を引き起こすと、『涿鹿大戦』の脚本家は自主的に貴州苗学会のミャオ族の作家や学者たちと連携を取り、共同で脚本の内容や構成などについて話し合った。そして「貴州苗学会」も「中華炎黄文化研究会」や「中国先秦史学会」と一緒に『涿鹿大戦』の制作組織委員会に名を連ねたのである。

しかし、新しい「歴史概念」を反映したドラマ『涿鹿大戦』は結局不発に終わった。同時期に制作された『炎黄二帝』やその後作られた『釜山大結盟』が順調に放映されたのとは対照的である。内情に詳

しい陳靖によれば、『涿鹿大戦』が流産した主な要因は「中華炎黄文化研究会」内部の一部の「正統観」を持った幹部の干渉と反対にあったのだという。『涿鹿大戦』の脚本家もそれらの圧力によって北京では創作が続けられなくなり、貴州苗学会に助けを求め、貴州の李廷貴の自宅で執筆を続けた。しかし結果的には支持を受けることができず、制作はお流れになったのである。後に陳靖はある文章の中で、「『釜山大結盟』も同じ中国作家協会の産物で、『炎黄二帝』の姉妹編でしかないのに、広播電視部の批准を受けたというのは、まさに彼らが97年に『炎黄二帝』に対して出した49号文書の精神に背くものではないのだろうか？」と指摘し、また、皮肉を込めて次のようにも述べている。「炎黄子孫たちの中に『信仰の危機』が訪れたので、党の民族政策をおおざなりにし、五千年前の蚩尤を『標的』に、それを征伐することで『団結力』を高めようというのであろうか。」³⁴⁾

ドラマ『炎黄二帝』と『釜山大結盟』はミャオ族社会から抗議を受けた後、最終的には放映停止となったが、広播電視部が「炎黄二帝」という言葉の使用を制限しようとした文書は漢族社会における「炎黄ブーム」を抑制する力をほとんど持たなかった。2000年8月、オリンピック招致運動に合わせ、國務院の批准を経て、外交部、公安部、体育総局、交通部、中国僑聯と国家旅遊局の共催で空前の規模の「全国炎黄千年祭賀行事（「普天炎黄賀千年」）」が開かれ、全国を東西南北に分け、複数のルートからなる「中華炎黄聖火」の点火とリレーが行われた。意味深長であったのは、おそらく主催者はこの行事が少数民族社会、特にミャオ族社会に不満を持たれるであろうとの意識を持っていたためか、「炎黄」の火のリレールートの一つにわざわざミャオ族地区に位置する湖南省と貴州省の境界にある「南長城」——すなわち、かつて王朝が「生苗」の侵入を防ぐために築いた城壁——を選んでいたのである。この場所で一組の「漢族」と「苗族」の男女の結婚式が盛大に催され、新婚夫婦の手によって「炎黄の聖火」の火がともされたのである³⁵⁾。しかし、この「漢苗の結婚」によってその歴史的な怨恨に終止符を打とうとする演出はかえって一部分のミャオ族知識人の怒りを招くことになった。ミャオ族の若手作家龍建剛は「他人のオリンピック（別人的奧運会）」という散文の中で以下のように述べている。

「今年の8月25日、新華社は「四本の炎黄の聖火が長沙に集まった」と報じたが、その中の一本は湘西鳳凰県の苗長城で点火されたものである。もちろんどこで点火すると決めようがそれは彼らの権利であるが、ミャオ族地区という非常に敏感な場所でもとされた炎が「炎黄の聖火」と名付けられたということについては、我々はよくよく考えないわけには行かない。同志の方々よ、あなた方は一体何をやりたいのだろうか？歴史をひもといてみれば、すぐにはっきり分かることだ。苗長城の一つ一つの石には抑圧された民族の鮮血が滴り、今でも血なまぐさい臭いが満ちているのだ……。こんな「聖火」など消えてしまえばよいのだ。」³⁶⁾。しかし、オリンピックは、2008年8月に北京で開催される。その時、ミャオ族の知識人は一体どのような反応を示すのであろうか。

おわりに

以上、90年代以降の漢族社会における「炎黄ブーム」とミャオ族社会における「蚩尤ブーム」の間の衝突について述べてきたが、実際のところこれらは現在の中国の複雑な民族問題の一側面を反映したものに過ぎない。表面的には蚩尤の歴史的地位の問題をめぐる展開してきた論争に過ぎないようであるが、実は現実的な国家の統合、民族の統合をめぐる複雑な相互関係をも明らかにしている問題なのである。現在、「炎黄ブーム」と「蚩尤ブーム」はそれぞれまだ下火になっていない。ミャオ族社会の知識人たちの中に噴出してきている不満というのは「国家」と「民族」という二つの異なる統合の言説の間の

矛盾に関わるものであると思われるのであるが、まだこれらの問題は政府の関連部門の注意を引いてはいない。今後の展開については、筆者も引き続き注意深く観察してゆきたいところである。

注

- 1) 楊培徳「電視劇『炎黄二帝』播出引起苗族強烈不滿」『苗学研究通訊』第 8 期 (1997 年), 及びウェブサイト『三苗網』<http://www.3miao.com/ancestors/ciyou/yangpd.htm>。
- 2) 筆者の 2000 年 8 月に行った楊培徳へのインタビューによる。
- 3) 同注 1。
- 4) 費孝通『中華民族多元一体格局』中央民族学院出版社, 1989 年。
- 5) 広播電影電視部司局文件——1997 年第 49 号, 貴州苗学会秘書処から提供されたコピー件。
- 6) 吳治清「重蹈旧轍的遺憾——評電視連續劇『釜山大結盟』」ウェブサイト『三苗網』(<http://www.3miao.com/ancestors/ciyou/>)。
- 7) 中華炎黄文化研究会常務副会長兼秘書長 魯淳「2002 年炎帝与漢民族国際学術研討会致辭」, ウェブサイト <http://bjic.balji.gov.cn/dzkw/shkw/02q354.htm> を参照。
- 8) 「中華炎黄聖火在湖南点燃」を参照 ウェブサイト『人民網』<http://www.people.com.cn/GB/channel4/995/20000822/196923.html>
- 9) 「華夏子孫公祭黄帝陵」『人民日報』2003 年 4 月 6 日第二版 「黄帝陵公祭拉开序幕 征選“民間公祭人”」ウェブサイト『新浪網』<http://cul.book.sina.com.cn/n/2004-02-19/49517.html>
- 10) 「陳靖同志給涿鹿県領導写的信」, 陳靖による提供, また, ウェブサイト『苗族信息与研究中心』を参照 (<http://666mms.topcool.net/ancestors/ciyou/chenj3.htm>)。
- 11) 『苗学研究通訊』第 6 期, 貴州苗学研究會秘書処編, 1996 年。
- 12) 『貴州民族報』1996 年 9 月 9 日第 3 版。
- 13) 論文の題目を列挙したものとして、『苗族研究通訊』第 7 期を参照。
- 14) ウェブサイト『三苗網』を参照 (<http://www.3miao.net>)。
- 15) 司馬遷『史記・封禪書』, 同『史記・高祖本紀』。
- 16) 最初明確に蚩尤を『苗族の首長』と指摘したのは、梁啓超であった。梁啓超「中国歷史上民族之研究」(1922 年)を参照、『飲冰室合集・飲冰室專集之四十一』所収 上海中華書局, 民国 47 年。
- 17) 李廷貴「提高民族素質 迎接新的挑戰」『苗族研究通訊』第 9 期, 1998 年。
- 18) 楊漢先「貴州威寧県苗族古史伝説」『貴州民族研究』1980 年 1 期。
- 19) 『貴州民族報』1995 年 11 月 27 日, 第三版。
- 20) 任昌華「簡談“三祖文化”始説」『苗学研究通訊』第 9 期, 1998 年, pp. 21-24。
- 21) 沙珠慧「實事求是 確認三始祖歷史地位——全国首届涿鹿黄帝, 炎帝, 蚩尤三祖文化學術檢討理論觀點綜述」『貴州民族報』1995 年 11 月 13 日, 第三版
- 22) 『苗学研究通訊』第 11 期, 2000 年, pp. 1-2。
- 23) この祭文の全文は「中華開国五千年, 神州軒轅自古傳。想像指南車, 平定蚩尤乱。世界文明, 唯有我先。」というものである。
- 24) オンラインゲーム『軒轅劍』(<http://games.sina.com.cn/z/xy/>)。
- 25) 村田雄二郎「中華ナショナリズムと“最後の帝国” 蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』東京大学出版会。
- 26) 坂本ひろ子『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー—』岩波書店, 2004 年
- 27) 王立新「中国近代民族主義的興起与抵抗美貨運動」, 中国社会科学院歴史研究編輯部『歴史研究』2000 年第一期。
- 28) 吳文藻「辺政学發凡」(1942 年発表), 同『吳文藻人類学社会科学研究文集』, 民族出版社, 1990 年所収, pp. 263-281。
- 29) 同注 6
- 30) 寧騷「論民族国家」『北京大學學報』1991 年第 6 期。
- 31) 「江沢民総書記与台湾『統聯』訪問団共話祖国統一」, 『人民日報』(海外版), 1990 年 3 月 12 日第二版。
- 32) 前掲『苗学研究通訊』第 8 期 (1997 年)。
- 33) 同上注, また前掲『苗学研究通訊』第 9 期に掲載された「多元一体鑄金甌—影視劇『涿鹿大戰』創作札記」を参照。

- 34) 陳靖「蚩尤問題一弁」 ウェブサイト『三苗網』を参照, <http://www.3miao.net>。
- 35) 「中華炎黄聖火在湖南点燃」を参照 ウェブサイト『人民網』<http://www.people.com.cn/GB/channel4/995/20000822/196923.html>。
- 36) 龍建鋼「別人的奧運会」, 原文はウェブ사이트『三苗網』の「世紀龍語」に載せたが, そのあと, 削除された。筆者は手元のコピーファイルを参照。